



Fig. 7. *Cordyceps michiganensis*. A. Stroma  $\times 8$ . B. Group of perithecia. C. Perithecia  $\times 5.5$ . D. Perithecial wall. E. Medulla of stalk. F. Peridium of stalk. G. Caps of asci. H. Sec. ascospores.

pl. 1 f. A-E (1934) et Mycologia 50: 183 (1958).

Hab. Larvae of Scarabae, Coleoptera, in rotten log, Michigan, U.S.A. Type in Michigan Herb. Distr. N. Carolina. Conidial state unknown.

Observation: Stroma cylindric, 10-20 $\times$ 0.7 mm, orange yellow, with acuminate sterile tip. Peridium pseudoparenchymatic, loosely composed of irregularly curved cells, fugacious. Medulla composed of densely woven hyphae. Perithecia superficial, densely aggregated at upper part of stroma forming clavate or fusiform fertile part or loosely aggregated forming several patches, deep orange yellow, ovoid, covered with cottony hyphal tuft at lower half, 300-400 $\times$ 250-300 $\mu$ . Asci 115-165 $\times$ 5-5.5 $\mu$ , cap 4-4.5 $\mu$  in diameter. Sec. ascospores 6-10 $\times$ 1-1.5 $\mu$ .

メインズの採った標本に基いて観察した記録とスケッチである。被子器の下半部を包む皮膜は仮柔組織の皮層と同一であり、彼の説くように被子器が皮層下の組織中に発生し、皮層を貫いて露出したことをよく示している。

○マメ科の新帰化植物オトメレンリソウ (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: On *Lathyrus clymenum* L., newly naturalized to Japan

レンリソウ属 *Lathyrus* の植物は、現在まで可成りのものの渡来が報ぜられているが、筆者も最近、神奈川県横浜市内の荒地に従来報告されていない本属の1種が帰化し、旺盛な生育を示しているのを見出したので、記録しておくこととしたい。

本種は無毛の1年草で、茎は通常 30~50cm 許（文献によれば、条件によって 1m 近くにもなるとい）で、両側に翼があり、やや扁平。葉は広い葉状を呈する葉柄と葉軸とを備え、下部のものは線状披針形で小葉を欠くが、上部のものは2~4対の小葉からなり、葉軸の先端は伸長、分岐し、巻ひげとなり、他物にまきつく。小葉は線状円形あるいは披針形状で対生し、長さ 5cm 内外。葉柄の基部には、長さ 10~15mm、幅 2~5mm 許の線状乃至卵円形状で、稀にやじり形をした托葉がある。

晩春から初夏にかけて、Fig. 1 のように各葉腋から長さ 4cm 内外の花軸を出し、1乃至数個の蝶形花をつける。花冠は草姿のわりには可成り大きく 15~20mm 許で、旗弁と翼弁は濃桃紫色、竜骨弁は淡桃(白)色を呈し、この両者のコントラストは美しく、まことに可憐な感じを与える。しかし原産地では、極めて稀に淡黄色のものもある由。莢果は褐色、無毛、扁平で、長さ 5cm 内外、5~7個の平滑種子を入れる。

今回、これを種々検討した結果、地中海沿岸地方を原産とし、現在、ヨーロッパ各地や小アジア、北アフリカにも分布する *Lathyrus clymenum* Linnaeus, Sp. Pl. 732 (1753) と判定した。彼地では Crimson Pea なる名で呼ばれているもので、草原や牧場、畑地などの周辺に生育するが、特に砂礫地を好む由である。

なお文献によれば、本種は可成り変化に富んだもので、今回、筆者が見出したものを細かく検討すると var. *articulatus* (L.) Arcangeli に該当するものかも知れない。しかしながら外来品は、あくまでも種を大きく扱うのが妥当である、との従来からの筆者の見解（植研 48: 70, 1973）にもとずき、この点については敢えて触れないこととする。



Fig. 1. *Lathyrus clymenum* L.: Left, a part of lower stems with immature pods found in open waste place of Yokohama. Right, flowers. (Phot. by Y. Asai on May 11, 1975).

因みに、北アメリカにも *Lathyrus* 属の植物が相当数分布している故、試みに手元の Hitchcock, C.L. の本属に関する Revision (1952) などで検討してみたところ、今回のものに最も近いと思われるものは、*L. palustris* L. (セイヨウレンリソウ) のみで、本種は北米へは帰化していないようであった。

なお本種に近似したものとしては、かつて久内清孝先生によって、やはり横浜から記録された *L. ochrus* (L.) De Candolle (*Pisum ochrus* L.) ヒゲレンリソウがある(植研 26: 348, 1951)。しかしながら、これは茎の上部の小葉の発達が悪く、しかも葉鞘が顕著な葉状に変じ、頂部に2個の巻ひげがあり、花冠も黄白色で、果実の背部の縫合線には2翼があるのに対し、本種では上部で2~4対の小葉をもち、花冠は紫色であり、スミレ色あるいはピンク、白色の翼弁をもつこと、果実には前者と異なり翼を具備しないこと、などにより明瞭に区別できる。

ところで今回の本種の侵入経路としては、我国屈指の貿易港を控えた場所柄だけに、恐らく同地域に陸上げされた輸入物資に由来するものと考えるのが異論のないところであろう。いずれにしても従来、我国に侵入が記録された外来雑草の中には、実に見栄えのしない Weedy なものが多いが、本種は草姿の割に大形の可憐な蝶形花をつける。したがって将来、これが広く野外でみられるようになれば、恐らくキキョウソウなどと共に当然好ましい帰化植物の1つになると考える。

A Mediterranean plant, *Lathyrus clymenum* L. was newly found by the author in open waste site of Yokohama, Kanagawa Pref., along the pacific coast of central Honshu, on May 11, 1975.

The seeds of this lovely weed may have probably been introduced from Europe mixed up with cargoes imported from the same region to the port of Yokohama near Tokyo.

(東京歯科大学)

□Jensen, A. & Stein, J. (ed.): **Proceedings of the Ninth International Seaweed Symposium.** xviii+634 pp. 1979. Science Press, Princeton. \$42. 1977年8月にアメリカ・カリフォルニアで開かれた第9回国際海藻学会議の講演集で、会議では特別講演3つを含む500以上の講演が行われたが、ここには61篇が選ばれている。ヒドロコロイド、排水処理及びエネルギー獲得のための海藻の栽培; 海藻の工業的利用一過去・現在・未来一; 海の農業、その現状と話題といった特別講演の題目からも推察できるように、この会議本来の目的である人生への応用に焦点を合わせ、この分野に関係の深い論文が、特別講演3, 生物学29, 化学18, 利用11の順序で掲載される。諸外国における海の植物利用の状況と将来への熱意の程を窺い知ることができる。(千原光雄)